様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３１２０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０７９８

研究課題名（和文）西夏語文献から見た、モンゴル軍侵攻期における西夏王国の防衛体制・仏教信仰の研究

研究課題名（英文）Research on defence system and Buddism of Xixia in the beginning of the 13th century

研究代表者
佐藤　貴保（sato, takayasu）

盛岡大学・文学部・准教授

研究者番号：４０４０３０２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、13世紀初頭、モンゴル帝国軍が繰り返し侵攻していたころの西夏王国の防衛体制や、仏教信仰事業とモンゴル軍侵攻との関係を明らかにするため、西夏とモンゴルとの国境付近の遺跡から見つかった西夏の行政文書や仏典の奥書を調査、解読した。その結果、1210年時点で西夏は都を守る兵力が不足していたこと、政府が国境付近の兵力を正確に把握していなかったこと等が明らかになった。仏教信仰政策については、13世紀初頭に書かれた仏典群の奥書を見る限り、モンゴル軍侵攻を意識したものは発見できず、特別な仏教事業は行われなかった可能性が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this research, we investigated and read Xixia administral documents and colophons of Buddhist sutras unearthed from the ruins located in near the Xixia-Mongolian border, and made it clear the defence attitude and relation between Xixia Buddhism and the Mongol invasion. As a result of our research, we clarified that Xixia was shorthanded its military force, and that Xixia government did not have an accurate its military force posting near the frontier. According to colophons of the sutras written in the begining of the 13th century, we did not find a feature been concious of the Mongol invasion. It is possible that Xixia government did not undertake Buddhism activity.

研究分野：中央ユーラシア史

キーワード：西夏　モンゴル　カラホト　防衛体制　仏教　敦煌

１．研究開始当初の背景

11 世紀前半に現在の中国西北部に建国された西夏王国は、ユーラシア大陸の東西を結ぶ交易路をおさえて繁栄した仏教国であったが、13 世紀初頭、北方のチンギス=ハン率いるモンゴル帝国（以下、モンゴル）軍の侵攻を受けて滅亡した。

ただ、西夏はモンゴルに一度の侵攻で滅ぼされたわけではなく、最初の侵攻から滅亡までの間（1203~27 年。以下、この期間を「モンゴル軍侵攻期」と呼ぶ）に、少なくとも 5 度にわたる侵攻を受け、いずれも敗北していたことはすでに知られている。ならば、西夏はモンゴル軍の最初の侵攻を受けた後、次なる侵攻にも備えていたはずであるが、それでも敗れた原因はモンゴルの軍事力の強さにあるのか、西夏側の防衛体制等の内情にあるのか。その内情に迫るには、西夏側の文献（ほとんどが西夏文字・西夏語で書かれる）を解読する必要があるが、文献の整理・公開の遅れから、研究はほぼ手つかずの状況にあった。しかしながら、近年のロシアの研究機関が所蔵する西夏側の文献が整理・公開され、しかもそれらがモンゴルとの最前線に位置するカラホト遺跡（中国内モンゴル自治区エチナ旗）で発見されたものであることから、当時の防衛態勢や仏教事業とのかかわりを解明できるのではないかと考え、本研究課題を着想するに至った。

２．研究の目的

本研究は 13 世紀初頭、モンゴル帝国軍の侵攻を受けた西夏王国が国境地帯でどのような防衛体制をしいていたか、モンゴルに敗れた原因が西夏側にもあるのか、西夏の仏典刊行事業がモンゴル軍の侵攻を背景として行われたのかを明らかにすることを目的とした。

具体的には、モンゴル軍侵攻期の西夏の動向を把握するため、20 世紀初頭にロシアの探検隊によって発見されたカラホト出土の西夏側の文献のうち、比較的まとまった量のある法令・官文書・仏典を解読して解明しようと試みた。また、甘粛省瓜州県の石窟寺院の壁面に西夏時代に書かれた題記が残されている可能性があることから、同寺院を訪問して題記のデータの収集も行った。

３．研究の方法

（１）ロシア所蔵カラホト文書の実見調査

研究代表者の佐藤と研究分担者の荒川は 2 度にわたり、ロシア科学アカデミー東方文献研究所を訪問し、同研究所が保管するカラホト出土西夏文文献を実見調査した。また、研究協力者の冨田裕子は 2012 年 8 月に財団法人東洋文庫（東京都文京区）所蔵する西夏語文献のマイクロフィルム画像を調査し、2013 年 8 月にロシア科学アカデミー東方文献研究所を訪問して、同研究所が保管するカラホト出土西夏文文献を実見調査した。そして、各メンバーは調査結果を基に、以下の諸点について明らかにしようと試みた。

①法令条文の比較研究

モンゴル軍侵攻期に編纂された西夏の法令集『亥年新法』と、モンゴル軍侵攻以前に編纂された法令集『天盛禁令』の軍事・通信に関する条文を解読、比較し、モンゴル軍の侵攻受けて西夏政府がどのような対応策を講じようとしていたのかを解明しようと試みた。

②官文書の解読

モンゴル軍侵攻期の紀年を有するカラホト出土の官文書約 40 点を解読し、法令に定められた防衛体制が実際に機能していたか検証しようと試みた。また、官文書から辺境地帯どうし、及び辺境と中央政府との間の指揮命令・情報伝達がどのように行なわれていたのか、防衛態勢をめぐって国内でどのような問題が発生していたのかを解明しようと試みた。

③仏典の刊行状況、奥書の研究

モンゴル軍侵攻期（1203～1227 年）と直前期（1180～1202 年）に刊行された仏典がロシア科学アカデミー東方文献研究所に約 40 点収蔵されている。侵攻期と直前期とでどのような種類の仏典が刊行されたのか、時代による傾向の違いがあるのかを明らかにするとともに、奥書を解読することによって、刊行事業を主宰したのは誰なのか、モンゴル軍の侵攻という国難を受けて仏教事業が何らかの対応を行っていたのかどうかを明らかにしようとした。

（２）石窟寺院題記の解読と研究

研究代表者の佐藤と研究分担者の荒川は、甘粛省瓜州県の石窟寺院楡林窟のうち計 40 窟の壁画を 2 度にわたって実見調査した。調査を通じて、モンゴル軍侵攻期に西夏人が書いた題記があるかどうか、それがモンゴル軍の侵攻という国難を受けたことと何らかの関係があるのかどうかを明らかにしようと試みた。

４．研究成果

（１）首都防衛態勢の不備

『亥年新法』の条文に、地方から召集して都の宮殿において西夏皇帝の側近に仕える任務に就く「待命者」とよばれる要員が期日までに集まらなかった場合の罰則を強化する内容が追加されていることが確認された。

1210 年に都（寧夏回族自治区銀川市）の中央政府からカラホトへ送られた官文書では、カラホトから派遣されるはずの要員が期日になっても都に到着していないこと、至急要員を派遣し、カラホトの担当の役人を処罰するための裁判を行うよう指示が出されて

いた。
　また同年に書かれた中央政府からカラホトに送られた別の官文書では、カラホトへ流罪になっていた元待命者を再び待命者に任じ、都へ呼び戻すように指示が出されていた。
　西夏の都が前年にモンゴル軍の攻撃を受けていたことはモンゴル側の記録によってすでに明らかになっているが、待命者として宮中で勤務すれば、将来官僚として登用され立身出世の道が開けるにもかかわらず、これに応じなかったり、流罪になった者まで呼び戻さねばならなかったという事情から、西夏が 1210 年の時点で都の警備すらままならなくなっていること、さらには王権の求心力が低下している様子をうかがうことができる。

（２）対外関係
　『亥年新法』の条文から、西のウイグル、北のモンゴル、南のチベットは敵国として扱う一方、「女国」なる国は友好国であるという趣旨の条文がいくつか検出された。この「女国」は、東方の女真人が建てた金帝国のことを指している可能性がある。金帝国は西夏と同様、モンゴル軍の侵入に悩まされていた国であり、「女国」が金帝国であるとすると、モンゴル軍の侵攻に対して西夏と金帝国が協調態勢を築こうとしていた可能性がある。

（３）国境付近の防衛態勢
　カラホト出土文献のうち、従来は楽器の設計図とみられていた図面が、実は投石器の設計図であることが荒川の研究によって明らかになった。別の官文書では、カラホトに投石器が実際に配備されていること、カラホトと数百キロメートル離れた粛州（甘粛省酒泉市）との間の烽火台を修築していることが記されており、防衛に必要な武器や通信施設を現地の役人が整備されていたことが確認された。
　一方で、カラホトで書かれた兵士のリスト（軍籍）からは、80 歳を越える兵士が多数登記されていることが明らかになった。軍籍は法令の規定どおりに書かれてはいるものの、これらが虚偽の記載であることは明らかである。
　また、中央政府が軍籍を再調査させたところ、実在しない兵士が多数いることを報告した文書の断片や、中央政府からカラホトへ運ばれる軍需物資の不足が常態化しており、現地の役人が自力で食糧を確保せねばならない状況であったことを記した文書が確認された。
　こうした官文書群の記述を総合すると、軍籍では中央政府からの軍需物資をより多く得たいがために、すでに死亡している兵士も登記し、兵士の数を水増ししていたものと考えられる。そして、このことから、中央政府は国境付近の兵力を正確には把握していなかったことが明らかになった。

（４）仏教事業とモンゴル軍侵攻との関連性
　侵攻直前期と侵攻期に刊行された仏典の種類を分析したところ、両者の期間で刊行された仏典の種類に大きな違いが無いこと、侵攻期に刊行された仏典の奥書に国家の安寧を願うような願文も記されていないことが判明した。
　よって、カラホトではモンゴル軍の侵攻を受けても、特別な仏教事業が行われてはいなかったものと推察されるが、侵攻期の仏典の奥書には敦煌など河西回廊（甘粛省西部）の者が事業に加わっていたことが新たに確認された。
　また、侵攻直前期の仏典のほとんどは刊本である一方、侵攻期のもののほとんどは写本であった。このことは、モンゴル軍の侵攻を受けた西夏では仏典の刊本を作成、印刷するような事業が行う余裕がないほど国内が混乱していたことを示唆している可能性がある。

（５）石窟題記の解読
　瓜州榆林窟の題記を調査した結果、モンゴル軍侵攻期に書かれたものと断定できるものは検出できなかった。しかしながら、モンゴル人の服装をした供養人の壁画の上に、西夏文字で題記が記されている例を検出することができた。これは、瓜州地域がモンゴル軍の支配を受けた後も、西夏語を解する西夏人がこの地域ないしは巡礼圏内にいたことを示す証左となるものである。そしてこのことは、モンゴル軍によるこの地域への征服活動によっても地域住民の民族構成が大きく変わっていないことを示している可能性がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計８件）
①佐藤貴保、モンゴル帝国軍侵攻期における西夏王国の防衛態勢—1210 年に書かれた行政文書の解読を通して—、比較文化研究、査読無、vol. 25, 2015, pp. 83-95.　※②の日本語訳

②SATO Takayasu, Defense Challenges for the Capital of the Xi Xia (Tangut) Kingdom: Evidence from Research on Khara-Khoto Documents from around 1210, *Central Asiatic Journal*, 査読有、vol. 57, 2015, pp. 201-208.

③佐藤貴保、西夏王国における交通制度の復原—公的旅行者の通行証・身分証の種類とその機能の分析を中心に—、環東アジア地域の歴史と「情報」、査読無、2014, pp. 119-149.

④佐藤貴保（馮培紅・王蕾訳）、西夏末期黒水城的状況—従両件西夏文文書談起、敦煌学

輯刊、査読無、no. 2013-1, 2013, pp. 163-180.

⑤荒川慎太郎、河西地域石窟の西夏文題記に関する覚書（3）、東ユーラシア出土文献研究通信、査読無、vol. 3, 2013, pp. 49-61.

⑥佐藤貴保、西夏王国の官印に関する基礎的研究－日本・中国・ロシア所蔵資料から－、資料学研究、査読有、vol. 10, 2013, pp. 1-24.

⑦SATO Takayasu Study of Messenger Passports in the Xi-Xia Dynasty, *Тангуты в Центральной Азии,* 査読有、2012, pp. 364-374.

⑧ARAKAWA Shintaro, On the Draft of a Tangut "Stone Launcher" -Tang. 46 inv. No. 156 (2006) inv. No. 5217 preserved in Oriental Manuscripts Institute, Russian Academy of Sciences-, *Письменные памятники Востока,* 査読有、vol. 16, 2012, pp. 44-51.

〔学会発表〕（計６件）

①SATO Takayasu, Studies of the Xixia Society Based on the Tangut Materials in Russia, International Workshop: Central Asian Documents Preserved in the Institute of Oriental Manuscript, Russian Academy of Sciences、2015 年 3 月 24 日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（東京都府中市）

②佐藤貴保、カラホト出土文献から見た 13 世紀初頭の西夏の動向、遼金西夏史研究会第 15 回大会、2015 年 3 月 21 日、大阪大学文学部（大阪府豊中市）

③荒川慎太郎、西夏文『金剛経纂』の成立過程について、遼金西夏史研究会第 15 回大会、2015 年 3 月 21 日、大阪大学文学部（大阪府豊中市）

④冨田（小野）裕子、草書体西夏文文献『亥年新法』巻 4 の条文解読と女真、国際ワークショップ東アジアの非漢語古語文献：書体研究の展望、2014 年 3 月 21 日、大谷大学文学部（京都府京都市）

⑤荒川慎太郎、佐藤貴保、莫高窟・楡林窟西夏文題記再考、法蔵敦煌文献輪読会、2013 年 12 月 21 日、蘭州大学（中華人民共和国蘭州市）

⑥佐藤貴保、西夏の官文書の書式について—カラホト出土文書と法令規定との対応関係の考察を中心に—、ワークショップ「ユーラシア東部地域における公文書の史的展開—胡漢文書の相互関係を視野に入れて—、2013 年 9 月 22 日、大阪大学文学部（大阪府豊中市）

〔図書〕（計１件）

①荒川慎太郎、松香堂、西夏文金剛経の研究、2014、556.

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

６．研究組織

(1)研究代表者

佐藤　貴保（SATO, Takayasu）
盛岡大学・文学部・准教授
研究者番号：４０４０３０２６

(2)研究分担者

荒川　慎太郎（ARAKAWA, Shintaro）
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究科・准教授
研究者番号：１０３６１７３４

(3)研究協力者

冨田　裕子（TOMITA, Hiroko）
岡山理科大学附属中学校・教諭